

二十歳おめでとうございます

8月15日(月)坂城町二十歳のつどいを新型コロナウイルス感染症の感染予防対策を講じて開催しました。これまで「坂城町成人式」として開催していましたが、2022年4月1日から成年年齢が18歳に引き下げられたことから、「坂城町二十歳のつどい」と名称を変更して開催しました。

町内では、平成13年4月2日から平成14年4月1日生まれの145名が20歳を迎えており、そのうち82名の皆さんが式典に出席されました。

二十歳を迎えられた皆さんのますますのご活躍とご多幸をお祈りしています。

第67回 坂城町二十歳のつどい

実行委員会代表の言葉



宮崎洋輔

第67回坂城町二十歳のつどいの実行委員会代表として、私、宮崎洋輔が挨拶をさせていただきます。

2020年から新型コロナウイルス感染症がまん延し、この二十歳のつどいが開催されるか、多くの方が懸念されていたと思います。しかし、こうしてこの会が開催され、旧友やお世話になった先生方と顔が合わせられたことを大変嬉しく思います。

山村町長様、清水教育長様、我々が坂城中学校を卒業する際、教頭先生として務めてくださった塚田公民館長様をはじめ、この会の開催に携わってくださった皆様、そして、わざわざ私たちのために集まってくくださった元担任の先生方に心より感謝申し上げます。

中学校を卒業してから5年が経ち、一人一人が様々な進路に向かっていきます。今があるのも、これまで私たちがあらゆる角度から支え、応援してくださった皆様のおかげだと思っております。これから、皆様にはまだまだ支えていただくことがあるかと思いますが、その際はどうぞよろしくお願いいたします。

さて、今この場に集まってきたみなさん、私も含め20歳、おめでとうございます。

坂城町の二十歳のつどいは、他の多くの地区とは異なり、夏に行われます。全員が20歳になり、こうして顔を合わせられること、嬉しく思います。中学校を卒業してから各々が自分自身で決めた進路へ向かいました。そこで様々な出会いや経験があり、中学生の時の面影よりもまた新しく、そして新しすぎず懐かしさを感じることでしょう。

今回、私が実行委員会

の代表としてみなさんの前で挨拶をさせていただく時に、なにを話そうか考えました。その時に思い浮かんだのが、この坂城町のことでした。当てはまらない方もいらつしやるかもしれないませんが、少なくとも中学校を卒業するまでの15年間、私たちはこの坂城町で育ちました。私は中学校を卒業した後、佐久長聖高校に入学し、寮生として3年間の高校生活を送りました。その3年間で思ったことは、家がある坂城町に帰ってきた時、なぜか安心がありました。自然が多く、季節にも恵まれたこの坂城町が安心する場所だと思ったのです。15年間お世話になった

この坂城町には親しみがある場所だと言えます。そんなことを考えていると、みなさんに知って欲しいことができました。それは坂城町に帰ってきて欲しいということですが、もちろん、「ずっといてくれ。」とまでは言いません。各々が自分自身で決めた道に進むことは素晴らしいことです。しかし、その自分の道を進んでいる時に、私は、みなさんにこの坂城町を思い出してもらいたいのです。学生や社会人になると、壁に直面する機会が多くなると思います。心が折れてしまったり、前向きになれなかったり、自分を責めて気が塞ぎ込んでしまったりしてしまうこともあるでしょう。そんな時に、この坂城町を思い出して欲しい。帰ってきて欲しいと思っています。

こんな話があります。

あるところにお金持ちの家庭がありました。父と母、息子2人と何人かいる使用人がいる豪邸です。その家では父が亡くなった後の遺産は、長男が7割、次男が3割貰うことになっていま



恩師の先生方



した。ある時、次男が父親に言いました。「お父さん、私がいただくことになってる財産を今、私にください。」そう言われた父は、次男に言われた通り財産を渡しました。それから数日も経たないうちにその次男は自分の荷物をまとめ、家を出て行きました。出ていった先では次男は余るほどある財産をふんだんに使い、楽しい時間を何日も過ごしましたが、お金は有限ではありません。とうとう全て使い終わってしまいました。そのとき、次男が過ごしている地域にひどい飢饉が訪れ、着る服も汚くなり、食べるのも困難になってしまいました。そして、その地方の住民の家にお邪魔し、家畜の世話をするともそこに寝泊まりしてしまいました。そうしているうちにようやく次男は気がきました。「わたしはなんてことをしたのだろう。父の家には食糧もあり、雇人も多くいる。それなのに私は今、飢えて死のうとしている。父のところに帰ろう。そうして父に謝り、雇人として働かせてもらおう。」こうして次

男は我にかえり、家に向かいました。向かっていると、家はまだ遠く離れているのに、父はずっと彼を待っていたのでしよう、次男を見つめ、走って彼の元へ行き、抱き寄せました。次男は言いました。「お父さんごめんください。私はあなたに悪いことをしてしまいました。息子と呼ばれる資格はありません。私を雇人として家に置いてください。」しかし、父は僕を呼んでこういいました。「早く最上の着物を彼に着させ、履き物を履かせなさい。そして最上の牛を屠つてきなさい。食べて楽しむのではないか。息子が生きて帰ってきてくれたの

だから。」それから祝宴が始まりました。

安心するところとは、このような場所ではないでしょうか。ホームタウンという場所はある場所なのではないでしょうか。homeとhouseは同じ家という意味の英語ですが、内容は違います。houseは家の形を指しますが、homeは帰る家のことを言います。15年間過ごしたこの坂城町は、我々のホームタウンです。帰ることが出来る場所です。ここには、話にもあつた父のように、迎えてくれる人、支えてくれる町の人、景色、自然、そして家族がいます。辛い時や苦しい時、倒れそうな時があれば、是非、坂城町を思い出し、帰ってきて欲しいと思います。

繰り返しになりますが、皆様、20歳おめでとうございませう。社会人としてもまだまだ未熟な私たちですが、坂城町に支えられ、大人としての成長、活躍をお祈り申し上げます。以上をもちまして、実行委員会代表の挨拶とさせていただきます。

500字リレートーク

コロナ流行の中での自分の仕事への思い

濱崎 千栄子

私は、坂城町でヘルパーをしています。ここコロナの流行によつて、様々なことを体験しました。まず、感染症のことを学び、対処する方法として、うがい手洗いはもちろん、予防服、一段階上の防護服への着脱方法、消防署の方の講習を全員で受けたり、また、訪問する家の方がその姿を見る反応に対処したりと、みんな一生懸命にやってきました。会社の上司の方々の御苦勞様の声に支えられたり、一緒に働く人たちと励まし合ったりして、明日も頑張ろうという気持ちで一致してチームプレーなんだとしみじみ感じました。信頼し合える関係は大切。良い人達と仕事していると感謝しています。もちろん仲間も幾人か感染しました。でも、その中の声にも感動しました。上司の方に「私が至らなくて、すみませんでした」と出社して来て語っていて「そんな事はないよ、あなたのせいじゃないよ」と上司が話され、温かいものを感じました。本当にその時の会話は忘れません。心に満ちあふれているものの中から人は語るものだと思います。その時、母が幼い時から語っていた言葉が思い出されました。「実れば実るほど、頭を垂れる稲穂かな」という言葉と「人のふり見て我がふり直せ」という言葉です。「謙遜でありなさい。へりくだつた思いを持ちなさい。また、人を見て良くない不快なことはやらない。良いことをしなさい」ということだつたと思います。今も教訓として残っています。職業柄、様々な境遇を持たれる方と接します。一人ひとりに向き合い、その方の人となり、敬意を払いつつ寄り添い、励まし、慰め、笑い、共に泣き、築き上げる為に言葉を用い、最新の技術を学びながら、続けていこうと思つています。

次は、宮原澄子さんです。



職場から見える景色